The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	社会の中の表現活動による日本語教育における表現活動の活性化
Author(s)	岡崎, 洋三
Citation	多文化社会と留学生交流 : 大阪大学国際教育交流センター研究論集. 2022, 26, p. 19-29
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86445
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『大阪大学国際教育交流センター研究論集　多文化社会と留学生交流』第26号（2022）

社会の中の表現活動による日本語教育における表現活動の活性化

岡崎　洋三*

要　旨

日本語教育において生まれた表現活動という概念は、社会における母語による言語活動を表現活動として捉え直すことによって、表現活動に必要とされる諸力についての新たなる考究を生み出す。表現活動においては、活動従事者の感受性、内発性、自己創作性、社会性、ライフワーク性が注目されるものとなり、表現活動の発展は、教育の世界と社会における双方向性のある活性化をもたらす可能性を持っている。

【キーワード】表現活動、母語での表現活動、探検、養老孟司、内発性、感受性、自己創作性

1　はじめに

筆者は、2010年より教育実践が開始された表現活動主導の日本語教育の授業に従事するなかで実践研究を積み重ねている（岡崎 2019:2020:2021）[1)]。そして、近年においては上級段階においての表現活動についての考究と探求的思索を深めており、日本語の学習者への表現活動の指導を行なうことを通じて、学習者の母語での表現活動というものもあり得るものであるという認識を強めている。これは、筆者が表現活動と捉えるものは母語でも第二言語でも外国語でも行ない得るものだということである。母語での表現活動とは、学校の国語科でのもの以前に、一般社会における言論活動を表現活動として捉え直したもののことを言っているが、母語で表現活動を行なうことは第二言語や外国語で行なう表現活動についても活性化させることになるのではないか、という問いを持つに至っているということである。

教育の領域における表現活動は教育のためのものであるとは言えるが、教育は社会の中にあるものであり、教育が社会へと開かれていくその社会性の道筋について注目するという場合は、この二つのものについての考察は必要なものとなるのではないか。

まず、2節で筆者が考究対象とする表現活動についての基本的な性質について述べる。3節で、本論でいう社会における表現活動の事例として梅棹忠夫、本多勝一、養老孟司をとりあげ、4節でこれについての考察を行なう。そして、5節で日本語教育における表現活動の実践事例について概観し、6節で筆者の課題について述べる。そして、7節で教育における表現活動の可能性について論じる。

2　表現活動と捉えるもの

日本語教育において表現活動と捉えるものの概要とその実践については5節で述べる。本節では、表現活動は母語においてもみられるものであるという筆者の観点において、その基本的な3つの性質について述べる。

本論において表現活動とするものとは、第一に、何らかの活動があり、そしてそれに関するものを書くというもののことをいう。例えば、旅行という活動をして、旅行記を書くという言語活動がある。これは、人の想像力などでいきなり書き始めるというようなものではないということであり、書く活動とそれに先行する活動は、どちらかを手段化するものではなく主従関係にもないとするものである。

この書くという活動は、より正確にいうならば、

*　大阪大学国際教育交流センター非常勤講師

行なった活動について言語で表現するということであり、体験と経験の言語化と捉えるものである。つまり、書くということなのだが、表現されることになるものをつくるということであり、それは作品化を行なうことになるということである。これは言語活動的には語るという活動になり得るものでもあり、語り合うことにも発展し得るというものである。

活動という用語は、日本語では経済活動、社会活動、クラブ活動というふうに、それがどんな活動であるかを具象化する言葉を必要とするが、本論でいう活動とは英語のactivityの和訳を意識したものであり、それは英語圏の辞書で、a thing that you do for interest or pleasure, or in order to achieve a particular aim（“Oxford Advanced Learner's Dictionary” 9th edition より）というふうに定義されるものである。人のさまざまな活動というものに注目し、その上で活動の言語化を捉えようということであり、これは活動重視というものである。

第二に、表現活動としての書く活動は、どういうものが表現されることになるのかが書きながら少しずつ分かってくるとするものである。書き表したいものがあるということは明らかなのだが、予定調和的には進みにくいとするものである。「表現する」の英語はexpressになるが、内なる何かが外に（ex）押し出される（press）ものであり、それは過程の中で顕現してくるとするものである。書くことに先行する活動においても、それがどういう活動になるかということについて同じことが言える。

第三に、活動を行なう者の内発性が注目されるものである。それは「やらされる」ことに対して「したい」とすることであり、その活動を行なうことについての当人自身の内的な必然性が注視されるというものである。これは「したいからする」という活動があるか、という問いがあるということであり、内発性とは、人の自らの内なるものとして発生し、それによって駆動されるというものであり、expressのpressの内からの力となるものである。

この内発性は外的には捉え難いものだが、筆者の注目は人の感受性である。感受性は日常用語であると同時に医学などの用語でもあるが、感受性において「受」となるもの、受け取るものが内発性と関係があるのではないかと推察している。expressとしての表現することは、良い感受を得ることとしてのimpressがあり、そしてexpressが進まない状態としてのdepressと関連づけられるものである。

以上のように捉える表現活動についての一般性が高い事例をあげるとすると、次のようなものがある。人がある人の著作を好んで読むようになり、全著作を読破するようになる。そして自らも書いてみるという衝動に駆られて書いてみる。書き進める過程において、自分がどういうものを書きたいのかは途中でわかりにくくなり、またうまく書けないという「停滞」も味わうことになる。そういう過程を乗り越えて書き上げたときに、自分が書きたかったものの全貌が自分でもわかることになり、達成感と満足感が得られることになる。そして、と同時に自らの限界もまた知ることになり、これによって次の活動にとりかかるということになる。

まとめると、書くことに先行する何らかの活動があり、書きたいものは当人においてよくわかっているとは限らないものであり、しかし、その活動をやらずにはいられないという内的必然性があるというものである。創作と呼ばれるもの、人の創造力と想像力を重視する活動は質的に異なる別のものとしてみることになる。

このような表現活動の事例として、次節において梅棹忠夫、本多勝一、養老孟司をとりあげてみる。

3　社会における表現活動の事例

本論でいう社会とは、「開かれている」公開性のある世界というものを意識したものである。成員や関係者が固定されているというような「閉じられた世界」に対しての開放性のある世界のことを言っている。例えば、専門家集団がつくる場というものは、外部とされる人間はそこへの参加や関与は制限されるが、それは社会性よりも「その世界」性が中心になるとみなされる。学校という世界もまた開放性としての社会性というものが制限されている世界であるだろう。

公開性のある社会には膨大な量の言語活動があるが、その中に表現活動として捉え直すことが可能なものがあるのではないかということで、事例として梅棹忠夫、本多勝一、養老孟司について考察してみる。

3-1　梅棹忠夫

梅棹忠夫（1920-2010）は、民族学、生態学、比較文明学等を専門とする学者であるが、社会において

精力的な言論活動を行なった思想家的存在でもあった。晩年の著作となった『梅棹忠夫　語る』の対談の聞き手である小山修三は、梅棹の主たる仕事として、文明の生態史観、情報産業論、民族学博物館の創設と運営をあげているが、筆者が注目するのは、梅棹の社会的な言論活動の原点や「出発点」となったものである。

梅棹は昆虫が好きな少年であったことによって山に行くようになり、そして、山歩きと登山そのもののほうに熱中するようになった。旧制高校では山岳部に入り、山にのめりこみすぎたあまり退学の危機に遭うほどであった。その登山とはスポーツではなく、自然の中に入り込んで大自然なるものと対峙するというものであった。15歳のときに、今西錦司らの白頭山登山の講演と記録映画に感銘を受け、自らの人生の進路を決めたという。20歳のときには、山岳部の仲間とともに朝鮮半島の白頭山に登頂後、北面にくだって第二松花江源流を確認するという地理学上の発見を行なった。これは探検的なものであり、後年のヒマラヤの学術探検隊への参加につながるものとなった。

梅棹忠夫は登山と探検に全精力を注いだ青年であったのであり、そして登山記と探検記を書いたのだった。梅棹が社会的に著名な人物になったのは、1956年に探検記『モゴール族探検記』を出版し、57年に雑誌の中央公論誌に「文明の生態史観序説」という論考を発表したことによるが、これは世に広くうったえる言論活動を行なったということであり、それは学者の研究活動というものよりも、表現せずにはいられないものが梅棹自身の中にあって、それが社会という広い世界へと押し出され、言論として社会にアピールすることになったものであった。

3-2　本多勝一

本多勝一（1931-）は、朝日新聞記者として傑出したルポルタージュを長年にわたって新聞紙上に発表し続けたジャーナリストである（岡崎 1990;2000）。その仕事は専門分野というものが特には無いという広範なものになるが、主なものとしてベトナム戦争の報道と、日中戦争の中国側の生き証人への聞き書きルポをあげられるだろう。

新聞記者としての初期の仕事としては、北海道の動物についての聞き書きの連載ルポと山岳遭難報道のスクープがあり、そして独自の企画ものとしての『極限の民族』の探訪記があるが、本多勝一に関しても記者活動の原点や「出発点」になったものについてみてみる。

本多勝一は高校生のときに初めての登山を体験し、高山の世界に魅せられる。山との出会いがあり、山歩きと登山に熱中するようになり、当時、未踏峰であったエベレストの初登頂に大志を抱くような山男になっていく。そして、それと同時に、親友との「初めての旅」というものを体験し、生涯忘れ難いという感動を得ることになる。これらのことが本多を登山の海外遠征と探検の世界へと誘うことになった。

本多は自身の登山、旅、探検に関してすべて登山記、旅行記、探検記を書いており、学生時代に探検記を出版している。つまり、青年探検家で探検記が書けるという人間が就職して新聞記者になったということである。本多勝一の仕事とは、新聞社という会社の社員としての仕事ではあるのだが、ジャーナリストとして挑まずにはいられないものとしての記者活動というものがあり、それは多くの場合危険で困難なものだったが、探検と冒険の精神と報道人としての矜持が本多勝一の背中を押し続けたのであった。

3-3　養老孟司

養老孟司（1937-）は解剖学者であり現代日本の著名な言論人の一人である。膨大な数の著作を持つ養老だが、一般書ということでの著作の出版を始めたのは1985年、47歳のときである。初期の著作は、専門家が一般書というかたちで広く世に問うというものであったが、89年の『唯脳論』は新しい言論人の登場を印象づけるものとなった。これは脳科学についての論考というものではなくて、人の脳の働きについての養老の思想を述べたものであり、それは日本の科学というものを批判的に論じるものとなり、そして、現代日本人の在り方と生き方に警鐘を鳴らすものでもあった。それまでには無かった思想が表現されたのであった。

養老は85年の第一作の著作のあとがきで、英語での専門的な論文を積み重ねていくのはもう止めて、日本語で書くことによって科学の内容を変えたいということを述べており、そのための言論活動を世の中に向かって開始したのであった。その主張の内容となるものは、広く世に問うしかないというものだったのである。

養老のそのような言論活動の原点と「出発点」は、

どういうものになるだろうか。養老の膨大な著作を読み進んでいくとわかることは、学者が長年蓄積した学識というものを一般社会に向けて一般書のかたちで問うようになったというのは表層的なことであり、より深層的には養老において一種の「開眼」的な心理的変容があり、このことが社会へ向けた養老の言論活動の活力となったとみられるということである。それは次の通りである。

1987年、40代の終わり頃に、養老は、「ここ数年、あることがあって、自分自身の心理分析をした。自分が何者であるかわかると、それまで四十数年間胸につかえていたものが、すっとなくなった（ような気がした）」と言っているのだが、これは養老が4歳の時の父親との死別体験についての一種の心理的克服があったということを指している（養老編 2005：55, 231）。父親との死別体験は養老にとって刻印的な体験でありながら、しかしそれによってどのような影響を受けたかということが当人自身にとって不分明であったのだが、人の死というものと対峙するのが自らの人生のテーマであり、自らの天命を40代の終わり頃に知ったということである。これについて養老が語っているものとしては例えば養老（2004a）がある。

本論では、表現活動は書くことに先行する人の活動があるものだとしているが、養老の言論活動に先行する諸活動としては、解剖学教室での公務があり、そしてもの心がついた頃からの人生の諸経験というものがある。養老の場合は、父親との死別体験以後の人生における長年の疑問と思索をすっきりさせることが言論活動となっていったということである。

これに加えることとしては、少年時代からの昆虫採集活動があげられるだろう。養老は少年時代から昆虫採集を続けており、鎌倉昆虫同好会という会において活動を行なっていた（養老編 2005：32）。養老は将来が楽しみな高校生としてTVに出演したこともあったという（宮澤編 2012：23）。昆虫採集と標本づくり、昆虫についての研究は養老孟司にとって、生涯にわたる愉悦だということであるが、「虫の視点」で人間社会と世界を見ることができるのである。それは、ものの見方と捉え方のモノサシの一つとなるものである。

養老孟司は解剖学者という専門家ではあるのだが、専門家として納まるのではなく、その逆に、思想、宗教、学問、環境問題、医療、文学、身体論などについて広く語っている。それは養老の中の内なる「表現されるもの」とは広い世界に出ることを望むものだということだろう。

4　社会における表現活動の事例の考察

社会における表現活動の事例として、梅棹忠夫、本多勝一、養老孟司の3人をとりあげたわけだが、どうしてこの3人なのかということについて考察し、そして活動を推進させる活力としての内発性と感受性について探ってみる。

4-1　3人の特性

キーワードとなるものは探検である。探検とは、存在するのかどうか不確かなものを探り調べるという知的かつ身体的な活動であるが、それは研究所の実験室での新発見というものではなく、未知なる環境の中に探検者が入り込んでいって発見を目指し、学術上の成果をあげることをはじめとして、その活動を通して何らかの達成感と満足感を得ようとするものである。

学術探検はScientific resultsという学術報告書に加えて、梅棹によれば、Narrativeという探検記を書くものでもあり、探検記を読むことによって人々はその探検について知ることができるようになる（梅棹 1990：498）。

探検記は支援者や協力者への報告を意識して書くものではあるが、探検というものを世に広くうったえたいという意志によるものでもある。探検とは人の好奇心と探求心、未知なるものへの憧れが特化したものであり、人類が地球上に広がったことと切り離せないものなのである。それは特殊ではあるが、しかし人としての普遍性があるというものである。このようにいう探検は、2節で述べたような表現活動になりやすいということだ。

梅棹と本多の関係は、その出会いとしては大学のクラブ活動の探検部の指導者と学生というものであった（京大探検者の会編 2006）。二人の違いは、梅棹は学者であり思想家的存在になっていき、本多はジャーナリストになっていったということである。

これに対して養老孟司は、自身の著作において探検という用語を使っていない言論人である。養老の東南アジアなどでの昆虫採集活動は実質的に探検的と言ってよいものであり、探検の「近く」にいたは

ずなのだが、養老の虫談義においても昆虫採集記においても探検という言葉は見当たらず、探検論も出てくる気配はない。

養老が長年従事していたのは大学の医学部の解剖学教室の公務である。養老が「発見」したのは、解剖されていく死体ではなくて、死体というものについての現代人の見方と捉え方であり、死体を見て捉えようとしている「この私」としての自分自身であった（養老 1986）。それが唯脳論に発展したということである。この「発見」は、父親との死別体験に無意識的に影響され続けてきた「この私」の発見でもあった。

養老が探検という言葉を使わないことに対して、それでよいとする解釈はあるだろう。それは、梅棹、川喜田二郎、本多が行なってきたような探検は過去のものであり、彼らの探検記は古典的なものになればよいということである。時代と人とともに探検という人類の活動もまた歴史の中のものになるということだ。これについて更なる考察をもたらすのは、梅棹が1972年に発表した探検人間論である（梅棹 1990:403-412）。梅棹は、自分自身も行なってきた学術探検を客観的な探検だとして、それに対して時代は変わり、個人的で主観的な「私の探検」というものが大衆化する時代がやってきたと言っているのである。そういう主観的な探検をやろうという人間を認めようと言っているのであるが、これについては二つのことが言えるだろう。一つは、探検の主観主義は探検というものを社会的に普及させ、多様化させるとは言えるのだが、探検が曖昧なものとなり、質の劣化ともなり得るものでもある。そうなったときに、むしろ探検という言葉は敬して遠ざけるという選択もあってよいだろうとも思われるのである。もう一つは、探検の主観主義と言うけれども、梅棹や川喜田は、昔から自分自身が探検の客観主義と主観主義の両方をやってきたのではないか、という見方である。それは、すなわち学術報告とナラティブのことである。ナラティブと呼ぶ探検記は良質な主観主義とでもいうものによって書かれたのではなかったか。それは敢えて言うならば、一種の文学性があるものだったのではないかということだ。このように考えると、養老は探検記は書かない「虫屋」ということであり、探検の「近く」にはいたのだが、主観的な探検という用語も言語表現的には控えるということなのではないかということである。ある「近さ」はあっても、質的に異なるということである。

梅棹の探検人間論とは、探検は探検するという動詞性を弱め、探検的な活動とか探検的にやってみるというような形容詞性や形容動詞性をもったものへ質的に変容していくということを語ったものだとも言えるだろう。

4-2　内発性と感受性についての考察

2節において、表現活動と捉えるものは活動者の活力となる内発性が注視されるということを述べた。これについて、梅棹の探検記『モゴール族探検記』は、梅棹自身の復活と再生、そして死というものについて考えさせられるものである。梅棹の文章は、読み手である読者が語り手である梅棹のすぐそばにいて、まるで探検隊と共に現地を行くかのような臨場感に溢れているが、これは梅棹自身の復活と再生と言えるものである。それはこの時の探検隊の参加は、梅棹にとって当時は不治の病とも言われた肺結核の療養を経ての挑戦だったということである。そして、死とは、梅棹がこの探検記を準備していた時に知らされた探検隊の仲間の急逝である。それは人の死というものがこんなにも突然やって来るということに衝撃を受けてしまうというものであった。梅棹のこの探検記は読み継がれる限りにおいて永久に生命を持つものであり、そしてそれは急死した仲間に対して捧げられるものとなったのである。梅棹の文章の活力として、このような生命性と死とがあった可能性があるだろう。

本多と養老の共通体験としても人との死別体験がある。養老の死別体験は先に述べたものだが、本多の場合は、本多が小学生のときの、わが家の最大の不幸としての幼い妹との死別体験である（本多 2008:113-128）。これについて本多が雑誌に発表したのは41歳頃だったと思われるのだが、それは親友に続いて父母を亡くすという体験をしていた頃である。2歳で亡くなってしまった妹の死についての本多のこの文章を読んで驚かされるのは、それはまるで映画を見るかのような映像的な描写だということである。本多は「晃子の死を告げられた瞬間の周辺は、風景がそのまま化石になってしまったかのように、何十年とのちになっても鮮やかに想い描くことができる」と書いているが、これは刻印的な記憶となっているということである。とすると、ここから出てくる想像としては、これを書いたのは41歳頃だとしても、

本多の心の中のどこかにこの時の記憶があり、何かの時に思い出すというものなのだろうかということである。このような記憶が人に与える影響はどういうものになるだろうか、と思われるということである。本多は高校生の時に山に感動し、旅にも感動し、ヒマラヤ探検を実現させ、仕事として海外の特派員もある新聞記者になった。そこには旅なるものへの憧れとそれを文章で作品化するという志向があったとみられるだろう。そのような記者活動時代を経て、やがてベトナム戦争やカンボジア大虐殺といった深刻な問題に向き合うようになっていったのだが、ジャーナリストとしての活動を深めるなかで、世の人々の不幸と苦しみと理不尽に接することが増えていき、日中戦争の生き証人の極限状況的な体験の聞き書きをすることによって、自らの原体験的な体験についても響くものがあった可能性も考えられるのである。

内発性は、内なる何かから生じてくるものである。これについては、筆者は人の感受性というものに注目しており、考えたいのは、「受」である。受け取るものとは、どういうものか、ということだ。感動や感銘というものを受け取った場合は、短期間でその影響が表れやすくなり、それについての応答的なものとしての言動が起こると考えられる。これに対して、人が危機的な衝撃を受けた場合は、その体験はいったん人の「どこか」に貯蔵され、保留的に対応するものになるのだろうか、ということについて考えさせられる。その「どこか」に受け取ったものは年月を経て人に何らかの変容をもたらすものになるのかどうか、ということである。養老の死別体験の場合は、年月を経て一種の克服となったと考えられるものであるが、克服を経て時機を得ることで語られて顕在化し、「実在」化するものがあるということだ。

4-3　書くことに先行する活動についての考察

梅棹と本多は登山と探検という明瞭な活動があったが、これに対して養老の場合は、どういう活動を行なってどういうものを書いたかということについての捉えにくさがある。これには、例えば、養老が若い頃に行なってきた鎌倉昆虫同好会の活動の詳細は公開されていないというようなことも指摘できるが、それよりも養老が書き表したいというものの内容、質との関係があるように思われる。それは事例を一つあげると、養老は次のようなことを書いており、それを要約的に引用してみる[2)]。

> 昭和38年に佐渡のドンデン山に一人で登って虫をとった。ドンデン山は、登ったら上の方は木がなく、草ばかり生えた禿げ山だった。なぜ禿げているのか私には不思議だったから覚えているのである。今回の旅行でその疑問が氷解した。佐渡博物館に戦前の古い乾板が保存されていて、その写真を見せていただき、当時のドンデン山の状況が写っており、牛馬が放牧されているのである。昭和30年代の終わりには、もはやその牛馬がいなかっただけのことである。こういう古い疑問が解けるのは、たいへんに気分がいい。私の頭のなかは、そんなふうになっているのである。あることを不思議に思う。それが解けるまでは、私の頭はそれを記憶している。解けてしまうと、もとの疑問はおそらく忘れてしまう。疑問と解答が融合して一つの事実となって記憶されるらしい。それは記憶というより、泳ぎを覚えるとか、自転車の乗り方を覚えるのに近いのかもしれない。それ以降はその「事実」は私の「常識」の一部を構成するようになるのである。こうして頭のなかに、世界のあるイメージがしだいに形成されていく。
>
> （養老 1998:158-159からの要約的引用）

文中の今回の旅行とは1995年のことであり、昭和38年（1963年）からは32年が経過している。養老には、上記のように、体験の中で生じた疑問、引っかかり、違和感、整理できないもの、捉え難いものを内的に持ち続けてしまうということがあり、これについて頭の中の整理をしてすっきりさせるということが「書くということ」になるということである。これについては、よく分からないものや違和感を持つものについて考え続けることができるかどうかということが注目されることになる。人にはそういうものを忘れてしまおうとする傾向があるからである。

4-4　自己創作性についての考察

筆者のいう社会における表現活動とは、公開性のある言語活動を表現活動として捉え直すというものだが、それは活動の方法論的なものは明示的ではないものである。論文の書き方や紀行文の書き方、文章の書き方というものがあるが、表現活動は、方法的なものがあらかじめわかっているというものではないとするものである。やってみることの中で生成

してくるというものなのである。比喩的に言えば、既にある階段を上がっていくことではなくて、未踏峰としての山の頂上に登ろうというものである。それは新しい体験と経験となるというものだ。

表現活動は手段的なものではなくて、それをやることそのものに意義が見出されるというものである。これは自己満足というものもあれば、自らのライフワーク性があるというものでもある。作品がつくられていくのだが、それは作者がより作者的な存在になっていくことでもあり、作者としての自らをつくっていくことになるというものである。これを表現活動に付随する自己創作と呼ぶことにする。

人は自らを解き放ち、自らを自由にするということも可能な存在である。自由とは変わっていくことができるということであり、変えることができるということである。それはチャレンジして何かを発見するということであり、そこには自分自身についての発見も含まれる。そのことが自らをつくっていくこと、自己創作にも繋がるというものである。この自己創作性を表現活動と捉えるものの性質に加えることができるだろう。

5　日本語教育における表現活動の事例

社会における表現活動は、まず表現者当人自身を活性化させることによって為されるものであり、そしてそれに親しむ人々を活性化するものとなる。教育における表現活動もまたこのような活性化が期待されると言えるだろう。

5-1　先行する表現活動の実践事例の概要

日本語教育における表現活動については、1990年代後半頃からの細川英雄による総合活動型日本語教育の教育実践と、2010年から教育実践が開始された西口光一による自己表現活動主導の基礎日本語教育が注目される。

表現活動の指導においては、細川のいう表現の扉は表現を行なおうとする者の内側からしか開かないという捉え方と、テーマに「自分をくぐらせる」ということについての指導者の考究と感知は不可欠のものになるだろう（細川 2021）。

西口は人の対話的交流において妥当とされるテーマ群を設定して、それをテーマについての「私の語り」としてのナラティブとして教材化し、入門段階からの表現活動を可能なものとした。西口のいう表現活動とは、バフチンとホルクイストの理論に、第二言語習得理論を融合させた理論によって展開されるものである（西口編 2020：1-18）。

西口のアプローチでは、日本語学習において学習者の現在に至る生活上の諸経験を問い、それが日本語で表現することの内容になるという活動が行なわれる。学習者の諸経験と生活習慣が問われ、それを日本語で表現することになるのである。これによって、その学習者がどのような人物であるかが周囲の人間に分かるようになるのである。

言語学習は、その言語を学習することで言語行動的に「できるようになること」が増えていき、学習が進むにつれて学習者の言動が変化していくことが期待され求められるものではあるのだが、そのこととは別に、成人学習者にはそれまでの人生の諸経験のついての経験知と経験値があるはずのものである。経験によって知っていることがあり、経験値とはその価値であり、主観的には当人にとっての自信となるものである。

2節において、本論で捉えようとする表現活動とは、まず何らかの活動があってそしてそれについて言語による表現を行なうものだと述べたが、これについて細川の場合は、表現されることになるものとは当人自身が何らかの状態で既に「持っている」とみなされるものであり、それは当人のそれまでの人生の諸経験と切り離せないと考えられるものであるはずである。そして、テーマに自分をくぐらせるという自分というものがあるはずなのである。西口の場合は、上述したように、学習において、表現することの内容となる生活上の諸経験と生活習慣というものを学習者は持っており、それを日本語で言語化するということである。つまり、日本語の知識と運用力以外のもので学習者が既に「持っているもの」と内的な諸力があるということである。

5-2　筆者の教育実践の概要

筆者の教育実践事例としては、上級段階の学習者を対象にactivityとしての活動をプロジェクトとして取り組ませ、学期末にプレゼンテーションを行なわせてレポートを作成するというものがある。何らかのテーマについて探求するという探求型、何らかの問題について考究するという問題解決型、何らかの作品をつくるという作品制作型の3つを想定し、学

習者にいずれかを選択させて、インタビュー、アンケート、調査、取材、学習などを行なわせてその成果を発表するというプロジェクトに取り組ませる。

これは、なぜそのテーマなのか、なぜそのようなプロジェクトをするのかということについて当人にとっての有意味性と意義が必要になるもので、指導者との間に合意が求められるものである。授業の表層にあるものは日本語力の育成と習得であるが、深層には若者の成長にとって必要とされる経験としてのプロジェクトというものがあると考えられるということである。それは授業において課題や宿題として「させられる」ことになるものに対しての「したい」ものについての合意的了解であり、学習者自身の自らのプロジェクトについての自己評価と自己満足についても重視することにつながるものである。

授業においては、プロジェクトのテーマが決まるまでの時期と、そしてプロジェクトが進行していくようになるために、適宜、必要と思われるインプットと学習と話し合いが実施される。教材はあらかじめ用意された読解教材に加えて、学習者の特性に応じて新たに用意する追加教材がある。学期の前半において指導者は授業を通じて学習者の特性を捉えることに努め、後半において学習者の特性に応じたインプットや講義を行なう。これはプロジェクト中心の授業と言えるのだが、学習者の日本語の運用力の向上というものを前面に出すものではなく、内容中心に日本語の指導を行なうというものである。学習者が自らの頭で考えてみることとチャレンジ的にやってみることに、そのような経験をすることの価値を見出そうとするもので、そのことと日本語力の向上を統合させようとするものである。一般的傾向として、すぐには成果的なものが出ないもの、すぐにはその価値がわかりにくいものに対してはそのことについてのストレスが生じる場合があるが、そのような過程や経験もあるということである。

このような授業の指導において最も注視することは、学習者の頭の働きと心の動きというものであり、そして、プロジェクト遂行に関わる学習者の母語レベルでの諸力である。その理由は、本論の立場では、人が行なっている日々の諸活動というものに注目しているということであり、それは人の成育史的には母語が中心になると考えられるからということである。

まとめると、有意義なプロジェクト活動が中心となり、活動に必要とされる日本語力と母語レベルの諸力の活性化が行なわれ、活動によって得られることになる経験知とその価値としての経験値が教育的に目指されている。

6　表現活動の指導の筆者の課題

日本語教育では日本語力というものを育成するわけであるが、表現活動を重視する立場においては、日本語での表現活動の指導を行なうことにおいて、学習者の母語レベルでの表現活動の諸力についての活性化にも繋がり得る指導というものについて考えさせられるようになってきている。これは、第一には、母語レベルでの表現活動に必要な諸力が不足しているという場合、そのことの影響が日本語の授業での活動においても出てくると考えられるということである。第二には、本論は社会における表現活動というものにも注目するものであるが、それは母語での表現活動になるというものであり、この観点からも注目させられるということである。第三に、人の諸活動についての経験知と経験値を重視するという立場に立っており、これについても母語レベルのものが注目させられることになるということである。

ここでいう経験知と経験値とは、人の生涯発達に関わるもので、人の成長に必要とされる諸経験があると考えるということである。これについてスポーツのアスリートの場合で説明を試みるならば、試合の経験というものが必要であり、そして試合についての良い経験が求められるということである。試合とは本論でいう activity のことであり、表現活動に先行する活動にあたるものである。

以上により、日本語での表現活動の指導を行ないながら、それが学習者の母語での表現活動を行なう諸力の活性化に繋がるようになる指導とは、どういうものになるかを考えさせられることになる。それは、内容中心の学習と活動を行ない、活動そのものの面白さと価値を感知できるように配慮しようとする指導である。そして、表現活動というものが展開し、発展していくということについて学習者自身が予見できるようになることが目標になる。これは可能性のある新しい世界へと視野を開かせるということであり、このようなことが母語レベルでの表現活動の諸力の活性化に繋がり得ると考えられるのである。

指導上の難しさとしては、学習者の可能性というものをどのように捉え、見出し、良い刺激を与えるか

ということがある。これは表現活動がどのように展開するか少しずつ分かってくるように、学習者についても段階を経て臨機応変的な対応が可能になるものである。それは、しかし、なかなか見えてこないという場合もあるというものであり、人の内発性と感受性を捉えるのは容易ではないということである。

このような捉え方については、日本語の母語話者は、日本人の英語力について思いを巡らすことができる。英語で考えるという活動を行なうという場合、日本語での思考力があるという者は、日本語と英語での思考の違いというものを捉えることも可能になり、双方の思考力の相互活性化も期待できることになるが、母語での思考力が不十分だという者はその影響が外国語についても出るのではないかということである[3)]。

7　教育における表現活動の可能性について

日本語教育においての表現活動は、筆者自身がその現場をよく知るものとしては、2010年から現在に至る西口のアプローチがある。筆者が教育の領域において考究する表現活動は、学習と活動を区分し、学習活動という用語を控えることになるものである。それは、教育機関においては客観的学力を育成するための学習が中心になりがちであり、活動らしい活動が手段的なものになっているという認識のもと、活動と呼べるものを活性化させていく必要があるということである。例えば、研究は研究という活動であり、学習で終わるものではないということである。アクティブラーニングについても、そのラーニングが学習であるとするならば、活動の観点からの改善があり得るだろう。

日本語教育における表現活動の活性化は、その可能性として母語での表現活動の活性化に繋がる可能性がある。それは、社会における表現活動に発展し得るものであり、その事例として本論では梅棹忠夫、本多勝一、養老孟司の言論活動の考察を行なった。表現活動の神髄は「したいからする」ということであり、せざるを得ないというものである。そういうものがあるかどうか、経験したことがあるかということが問われるというものである。教育は、そのような表現活動の入門の場であり、体験の機会であり得るのではないだろうか。

本論でいう表現活動は、書く活動には先行的に行なう活動があるとするものであるが、活動というものの中で生まれてくる言葉があり、活性化される言葉があるということである。言葉を支え、基盤となる活動があるということであり、このことの可能性があると考えられるのである。

8　結びにかえて

高等教育における学生の学業とは科学や学問の世界に入門し、専門性を身につけることである。それは大多数の学生にとっては卒業や修了によっていったん終わるものである。留学生にとっての大学での日本語の授業も、日本語力を身につける過程としてのものとして位置づけられるものではある。

これに対して、本論で考察した表現活動とはライフワーク性があるものであり、生涯続けることが期待されるものである。そういうものになり得るものとしての表現活動が探求され考究されるということなのである。

日本語教育において始まった表現活動は、日本語教育の領域での展開と発展が期待され、そして社会における母語での表現活動というものに注目することによって、両者の相互的な活性化が期待されるものにもなる。それを支えるものとしては、人の生涯発達の考え方があるだろう。Helson& Srivastava（2001）は、精神的健康を保つ生き方のスタイルに関して、Environmental Mastery（環境習得）と Personal Growth（個人的成長）という２つの次元・尺度があるとして、成熟のタイプの３類型として conserver, seeker, achiever をあげている。鈴木忠はこれについて論じ、保守型、探求型、目標達成型があるとして、「既存の考え方に異議申し立てをする少数派に位置し続けることでこそ納得し満足するような、いわば「とがった」成熟のしかた（探求型）もある。」と言っている（鈴木・飯牟礼・滝口 2016:197）。

表現活動とは、本論の事例にみられるように、探求型の人間がまず育つことになり、そしてそれを目標達成型へと発展させる可能性があるものである。ライフワーク性があり、自己創作性のある表現活動は人の生涯発達に繋がる活動としても捉えられるだろう。

注

1） 西口光一が開発した教科書のNEJを使った教育実践においては、表現活動のことを自己表現活動という用語でいう。

2） 筆者のいう要約的引用とは、原文を可能な限り使って要約するというものであり、中略などの表示は無い。

3） 安西（2005）でいう語力の概念は、表現活動を推進する力として関連づける議論が可能だろう。

参考文献

安西祐一郎（2005）「語力と教育」，大津由紀雄編『小学校での英語教育は必要ない！』慶應義塾大学出版会，pp.248-260.

池田光穂・徐淑子（2016）「学習者から探求者へ――オランダ・マーストリヒト大学におけるPBL教育――」『大阪大学高等教育研究』，第05号，p.19-29.

梅棹忠夫（1990）『梅棹忠夫著作集　第1巻』中央公論社

梅棹忠夫・小山修三（2010）『梅棹忠夫　語る』日本経済新聞出版社.

大津由紀雄編（2005）『小学校での英語教育は必要ない！』慶應義塾大学出版会.

岡崎洋三（1988）『日本語とテンの打ち方』晩聲社.

岡崎洋三（1990）『本多勝一の研究』晩聲社.

岡崎洋三（2000）『本多勝一の探検と冒険』山と溪谷社.

岡崎洋三・西口光一・山田泉編（2003）『人間主義の日本語教育』凡人社.

岡崎洋三（2013）「言葉の「内言的」意味と、マスターテクストアプローチでの自己表現活動」，『大阪大学国際教育交流センター研究論集　多文化社会と留学生交流』，第17号，pp.59-64.

岡崎洋三（2014）「自己表現活動中心のマスターテクスト・アプローチによる自己創作」，『大阪大学国際教育交流センター研究論集　多文化社会と留学生交流』，第18号，pp.55-66.

岡崎洋三（2015a）「探求性のある学習」，『大阪大学国際教育交流センター研究論集　多文化社会と留学生交流』，第19号，pp.65-74.

岡崎洋三（2015b）「表現の壁と表記の壁」，『ことばと文字』，4号，くろしお出版，pp.184-192.

岡崎洋三（2015c）「初級段階における体験の言語経験化と『私をくぐらせる』活動」，日本語教育学会2015年秋季大会予稿集，pp.217-222.

岡崎洋三（2016）「表現活動とアイデンティティと表現活動のZPD」，西口光一・森篤嗣・岡崎洋三・三代純平「表現活動、エンゲージメント、日本語の習得と教育」，日本語教育学会2016年春季大会予稿集，pp.24-26.

岡崎洋三・滝井未来（2017）「ヴォイスの獲得を活性化するエッセイのフィードバックについての一考察」，『大阪大学国際教育交流センター研究論集　多文化社会と留学生交流』，第21号，pp.19-28.

岡崎洋三（2017）「初級段階からの自己表現活動によるCCBIの活性化の可能性」，日本語教育学会2017年春季大会予稿集，pp.266-271.

岡崎洋三（2018a）「言語活動の活性化による学習の質的変革」，『大阪大学国際教育交流センター研究論集多文化社会と留学生交流』，第22号，pp.47-55.

岡崎洋三（2018b）「表現活動における臨床性のある関係づくりの可能性」，日本語教育学会2018年春季大会予稿集，pp.87-92.

岡崎洋三（2019）「リベラルアーツへと向かう日本語教育」，『大阪大学国際教育交流センター研究論集　多文化社会と留学生交流』第23号　pp.9-18.

岡崎洋三・池田光穂（2019）「本多勝一と山口昌男の噛み合わない論争：1970年の文化人類学と報道ジャーナリズム」，Co*Design, no.6, pp.13-32.

岡崎洋三（2020）「表現活動の深層を探る」，西口光一編『思考と言語の実践活動へ　日本語教育における表現活動の意義と可能性』ココ出版 pp.35-64.

岡崎洋三（2021）「日本語学習と表現活動」『大阪大学国際教育交流センター研究論集　多文化社会と留学生交流』第25号　pp.21-30.

川喜田二郎（1995）『川喜田二郎著作集　第1巻』中央公論社

京大探検者の会編（2006）『京大探検部［1956-2006］』新樹社.

鈴木忠（2008）『生涯発達のダイナミクス　知の多様性生きかたの可塑性』東京大学出版会.

鈴木忠・飯牟礼悦子・滝口のぞみ（2016）『生涯発達心理学　認知・対人関係・自己から読み解く』有斐閣.

鈴木忠・西平直（2014）『生涯発達とライフサイクル』東京大学出版会.

西口光一・滝井未来・義永未央子・岡崎洋三（2012）「対話原理に基づく基礎日本語習得――理論と実践――」，日本語教育国際研究大会名古屋2012研究発表予稿集，第2分冊，p.48-49.

西口光一（2013）『第二言語教育におけるバフチン的視点　第二言語教育学の基盤として』くろしお出版.

西口光一（2015）『対話原理と第二言語の習得と教育――第二言語教育におけるバフチン的アプローチ』くろしお出版.

西口光一（2020a）『新次元の日本語教育の理論と企画と実践　第二言語教育学と表現活動中心のアプローチ』くろしお出版.

西口光一（2020b）『第二言語教育のためのことば学人文・社会科学から読み解く対話論的な言語観』福村出版.

西口光一編（2020）『思考と言語の実践活動へ　日本語

教育における表現活動の意義と可能性』ココ出版.
細川英雄（2021）『自分の〈ことば〉をつくる　あなたにしか語れないことを表現する技術』ディスカヴァー・トゥエンティワン.
本多勝一（1993-1999）『本多勝一集』朝日新聞社.
本多勝一（2008）『俺が子どもだったころ』朝日新聞社.
宮沢輝夫編著（2012）『大人になった虫とり少年』朝日出版社.
養老孟司（1985）『ヒトの見方』筑摩書房.
養老孟司（1986）『形を読む』培風館.
養老孟司（1989）『唯脳論』青土社.
養老孟司（1996a）『考えるヒト』筑摩書房.
養老孟司（1996b）『日本人の身体観の歴史』法蔵館.
養老孟司・奥本大三郎・池田清彦（1996）『三人寄れば虫の知恵』洋泉社.
養老孟司（1997）『臨床哲学』哲学書房.
養老孟司（1998）『I KNOW YOU 脳』かまくら春秋社.
養老孟司・中村桂子（2001）『生命の文法　〈情報学〉と〈生きること〉』哲学書房.
養老孟司（2002）『人間科学』筑摩書房.
養老孟司（2003）『バカの壁』新潮社.
養老孟司（2004a）『死の壁』新潮社.
養老孟司（2004b）『運のつき　死からはじめる逆向き人生論』マガジンハウス.
養老孟司編（2005）『養老先生と遊ぶ　養老孟司まるごと一冊』新潮社.
養老孟司（2011）『養老孟司の大言論ⅠⅡⅢ』新潮社.
養老孟司（2015）『虫の虫』 廣済堂出版.
養老孟司（2017）『遺言。』新潮社.
養老孟司（2019）「解剖学という基礎」,『解剖学雑誌』94巻, pp.34-37.
養老孟司・柏木博・中川恵一（2019）『がんから始まる生き方』NHK 出版.
Helson, R., & Srivastava, S.（2001）. Three paths of adult development: Conservers, seekers, and achievers. *Journal of Personality and Social Psychology,* 80（6）, 995-1010.